

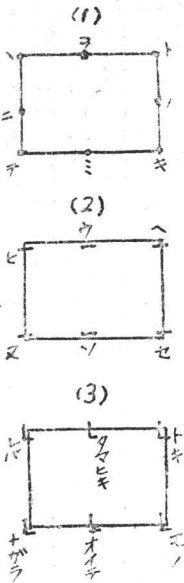
点 本 入 門

遠 藤 嘉 基

訓点資料がどんなもので、国語研究のうえに、どのような位置を占めるものであるかについては、不十分ながら拙著「訓点資料と訓点語の研究（京都大学国文学会刊）」を見ていただくのが早道かと思うが、ここでは少し方向を変えて解説してみよう。

○訓点資料とは

「金光明最勝王経の古点」とか「地藏十輪経元慶点について」とかいう標題のついた論文を見ると、たいてい次のような図が載せてあるのに気づくであろう。



右の四角の図は漢字の形を示したものであり、それぞれのカナは、符号のその位置における訓み方を表わしている。これを点図と云い、(1)を星点、(2)を線点、(3)を鈎点と呼び慣わしているが、訓点資料は、つまりこのような点によって原文である漢文の訓み

方を示したものである。例えば有 とあれば、右の図に照らして 有て と訓むが如きである。印刷がめんどうであるから省略するが、線点鈎点のばあいも亦同じである。なお星点線点鈎点といっても、右にあげたのは一例であって、実際には複雑な様相を描いているから、一つの資料のなかにあっても点図は三つや四つで終わるものではないし、訓を示す点の位置も、右に示したのよりも簡単なものあれば、もっと複雑なものもあるわけである。くわしくは拙著を見ていただきたい。また点と訓との位置は、いつも右の図のように固定しているわけではない。これは一例を示したのであって、資料によってそれぞれ違う。星点図に例をとってみると、四隅がテハトキとなるのもあれば、テニハヲ・テニヲハ・テヲニハ・ヲニハテ・ノスカテとなるものもあるといったぐあいである。では、この点と訓との位置関係は無数に秩序なく成立するかというと、必ずしもそうではない。だいたい真言宗の高野山系と三論宗の東大寺系はテハトキ（ただし、こまかい点では違ってくる）、仁和寺系と博士家はテニヲハ、禪林寺系はテニハヲ、法相宗の興福寺系はヲニハテ、天台宗の比叡山系はノスカテ、三井寺系はテヲニハというように、宗派あるいは学統によって方式は定

まっていたようである。そこで、こんな区別が見られるのは何故か、という問題などが考えられることになる。

さて、このような点を一般にヨト点と呼ぶのであるが（なぜそう呼ぶかという問題は省いて）、この種の研究報告にヨト点図と共に附くのはカナ表である。何を今さらカナ表をなどと思う人もあろうが、今日のように片カナ平カナの字態が固定化したのは比較的新しい時代なのであって、実は古いところになればなるほど異体の文字は多いのである。例えば、aの音をあらわす片カナを調べてみると

#### ㇿアフィー

などがある。foの音のカナになると、片カナだけでも二十三種類あるほどである。勿論一つの資料のなかに、二十三もの異体がいられるわけではない。その中のいくつかが用いられているのであるが、ヨト点図のばあいと同様に、カナの使用にも、ある宗派や学統の色彩が出ていることは否めないようである。尤も、これらの異体ガナも平安朝中期以後になると、次第に整理されて今日の字態もしくはそれに近いものが多く用いられるようになるが、カナ文字発生期ごろと思われる平安初期の資料には、うっかりすると字源さえないかなか考え及ばぬようなカナ字態が現われるので、どうしてもカナ表が必要になってくるのである。今は主として片カナについて述べたが、平カナもないではない。ごく初期のものになると万葉ガナも見えるが、この資料では片カナが主流を占めている。いづれにしても、片カナ平カナのいわゆるカナ文字は、万葉ガナから生まれたものといわれるだけに、訓点資

料の、とくに初期のものには、カナ展開の相をさぐるうえに有力な手がかりを与えるものがあるという意味で注目されよう。次に、このカナ文字は資料のうえに、どのようにあらわれるかといえ、例えば、訴ツツのように出てくる。今は印刷のべんきを思い、ごく普通の例を出しておいたが、このように漢字の訓を示すためにカナは施されているのである。

そこで、われわれは次のことがわかったのである。訓点資料においては、漢字の訓を示すのにヨト点とカナ文字を以てしたというところを。ところで、この訓には、ヨト点だけで、あるいはカナだけで示しているものもあるが、どちらかといえ、実は、訴ツツのように、ヨト点とカナ文字との両者あいまって訓むという式の方が多いのである。つまり、ヨト点図やカナ表は、この資料を解いていく手がかりになるのだから、これを作ることは最も大事な仕事のひとつとなるのである。

さて、いま作ると云つたのは何故か。読者のなかに、以上に述べてきたことからして、これらのヨト点図やカナ表のようなものは、あるいは師資伝受の如きものがあるが、そのばあいに使われたのではないかと想像されている方もあろう。たしかに考えられることである。点図集というものがある位だから。しかし、点図集にあるようなものが出来たのは、おそらくは平安朝中期以後であって、それ以前は固定化する迄の動搖の期間であつたらしい。したがって、中期以前の資料になると、点やカナはそれぞれ違っているがゆえに、当然カナ表や点図を研究者自らが作つていかなばならなくなる。どうして作るかといえ、これは帰納法に

よるより外ない。ヲコト点についていうならば、どれか一つ四隅の左下がテと訓めたとする。いちおうテと仮定して、それで他のばあいもよければテと決定して、次に移るのである。だから、この基礎的作業は時間を要し且つ根気を要する。根気を要するといへば、これらの点やカナが小さく、ある時は乱暴に、あるいは薄く書かれていることであろう。だいたい点やカナは朱で加筆されるばあいが多いが、初期のものになると白粉である。しかるに、この白粉は剝落しやすいうえに、太陽の光線にあてると見にくいという性格を持っているので、この基礎作業がいよいよ困難を極めるわけであろう。

以上、この資料関係の論文に、なぜ点図とカナ表が出てくるかの理由を辿ってみた。そして、この敘述のなかに、しばしば出てくる漢字と訓との関係とかその他の言葉で、この資料がほどのよさうな種類のものか、についての見当のつかれた方もあると思う。この資料は、原文が漢文である。そして、多くは仏典であることも右に述べた事からで想像がっこう。また博士家といった事などから、いわゆる論語などの漢籍や記紀の如き国書類の含まれることも推定されよう。いわば、これらの漢文に白粉や朱墨で以て、ヲコト点とカナを施して訓を示したものである。それが訓点料資なのである。

この訓は、たんに語彙の訓みだけを示したのではない。原文を講義したものである。その草案か筆記したものか、である。だから、これを書きくだすと漢字交り文となるわけである。

### ○どんな研究ができるか

この漢字交りをよむと、同じく平安朝といっても、カナ文学系統とかなり違うことがわかる。この資料が「漢文の訓読である」という性格によるのであろう。だいたい、この資料に関係するのは当時の知識層であった。この層は漢字漢語を地盤とするもので、当時のならわしからして、それは男子であったのである（勿論庶民のそれではない）。そんなわけで、訓読は勢い漢文訓読体になっっていくのであろうし、自然と源氏物語などの文体と性質を異にしてくるわけだが、一面また講義であるところに、いうところの漢文訓読体とも相違する点があると思われる。では、それはどのように違うか。漢文訓読の面では、すでに山田孝雄博士に名著があるが、これらに関して、今後この資料関係から明らかにしていく必要がある、その意味で中田祝夫氏、築島裕氏などの業績が期待されよう。

さて、カナ文学系統との相違は語法・語彙・音韻と見ていくにつれてわかってくる。語法については、何といても春日博士の「西大寺本金光明最勝王經の国語学的研究」であろうが、これから平安朝の語法について語るばあいには、もはや「平安朝文法史」一つを見ただけでは役に立たなくなつたことを考えると、まず語法研究は右の著書あたりから出発せねばなるまい。語彙は、カナ文学に見えぬ前代のものを承けていたりするので、古代語研究にも役立つが、一面当時の口語と考えられるものもあり、これが現代語につながる為に、コトバの歩みを辿るのに参考になる点

が多い。また、資料における漢字と訓との関係は必ずしもイコールではないからして、速断は禁物であるけれども、この二つの関係をさぐることによって語源を考えつくこともある。音韻に関しては、訓点資料の性格という点から若干の考慮が必要であるけれども、とにかくカナ文学系統と違って原本がナマのまま存在する点で、国語音韻（アクセントの問題をも含めて）の側からも、漢字音考察のうえからも有力の資料というに吝かでない。なお、これらに関する具体例については拙著に述べておいたことである。

○これからの研究

これを考える為には、今日までの研究史をふり返ってみる必要がある。その手がかりになるのは、この種関係の論文目録の類にならうが、これも築島裕氏に乞うて拙著を飾ることをえたので、これを利用するのがべんりである。さて、これからの研究の方向であるが、これについてはいろいろ考え方もあらうけれども、今日の段階としては、資料の一つ一つについての詳しい報告を作り上げることであらう。この種の資料の重要性はわかっている、一般には複製本さえ身近に見ることの出来ぬ現状にあっては、あるていどの利用価値を持つほどのレポートが望ましい。そのうちには、一様に訓点資料といわれているものなかで、いかかかと思われるものも出てき、整理なり新たな分類なりを必要とするものが生じないとも限らない。たとえば、築島氏も書いた東大寺諷誦文稿の如き。あるいは訓点資料とは何かという根本問題に立入らねばならぬ時がくるかも知れない。とにかく、何かとい

えば「仮名字体沿革史料」にたよりがちな今日では、「西大寺本金光明最勝王経の国語学的研究」には及ばずとも、これに似たものを次々に出すことが必要であらう。同時に一方では、これらの報告に基づいて訓点語彙集の如きものを作っていくことである。恐らく同じ志の方々は、それぞれに語彙カードを持っておられることと思う。わたくしは、これらの方々が協力して——中間報告的なものでもよい——出来るだけ早い機会に発表されることを期待してやまない。これによって、どれだけ学界が益を蒙むるかわからないと思うからである。

最後に——資料は勿論平安初期あたりの古いものが望ましいが、しかし院政鎌倉期あたりの後のものでも、扱い方によっては価値のあることを申添えておきたい。

(一九五二・七・一)  
 京都大学教授・文学博士